

行	動	の	発	達	的	意	味	と	機	能											
新	版	K	式	発	達	検	査	を	め	ぐ	っ	て	1	0							
												大	谷	多	加	志					

毎年、6月から10月までの5ヵ月間はK式発達検査の研修の仕事が立て込む時期です。今年は合計32日間、研修を行っていました。そして先日は機会を得て、大学の授業でゲストスピーカーとしてK式発達検査についてお話させて頂くことができました。普段の講習会では「K式を学ぶこと」を目的にしておられる方が対象となるわけですが、大学の授業を受ける学生の方々はそのではなく、こちらも普段とは違う準備をして臨むことになりました。その準備を通して、久しぶりに新鮮な眼で検査について考えたことが、自分にとってはとてもよい機会となりました。今回のテーマは、こんな過程の中で頭に浮かんできたものです。

検査が見ているものは？

授業内容の打ち合わせの中で、「学生の方は、心理検査について、こういう結果だったらこう言える、とシンプルに白黒つくもの考える傾向が強い」というお話をうかがいました。検査の実態をあまり知らなければ当然と言えるところでもあるので、それは納得だったのですが、よくよく考えると、職場でのK式発達検査の講習会でも、それと近いことを感じることに思い当たり

ました。

それは、検査の解釈に関わる部分です。K式発達検査にもたくさんの検査項目がありますが、極端に言うと各検査項目について「+だったら〇〇の力がある」（逆に言うと「-だったら〇〇の力がない」という前提があるように誤解されているのでは思うことがあります。これも、ある意味シンプルに白黒がつく世界です。ただ、実際の検査の解釈はこれほどシンプルではありません。これまでの連載でも、何度かこのような話に触れてきたように思いますが、今回はこのことについて、「検査場面は構造化された観察場面」とあるという考え方を切り口にして、整理してみようと思います。

通過・不通過と発達の力量

K式発達検査の講習会では、講義以外に質疑応答の時間を多く設けています。その中では「検査の実施」や「通過・不通過の判断」についての質問が多く出ます。質問の内容は多岐に渡ります。

例えば実施に関する部分では、言葉での教示では題意が理解できない子どもに対して身振りや絵、文字など視覚的な材料を使って、題意が理解できるようにしてもよい

か、という質問があつたりします。通過・不通過の判断に関する質問も、これと関連していたものも多く、ではこのように課題の手続きや状況を変更したとき、通過基準を満たすような行動が見られた場合、「通過」と判断してよいか、というような質問が出ることもあります。

これらの質問の根底あるのは、検査者の中の「通過・不通過の判断と発達的な評価の乖離」の感覚ではないかと思っています。つまり、例えば「題意さえわかれば課題自体はやりこなせる力がある（発達の力量はある）」のに、「題意がわからないため、不通過（評価されない）」になることに対して、「腑に落ちない」という感覚があるのではないのでしょうか。

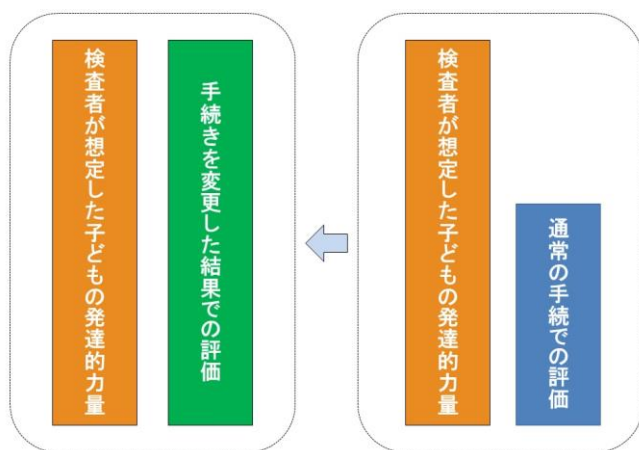


図1. 検査手続きの変更と発達の評価

図1は、この時の検査者の思考を図式化したものです。そもそも、手続きの変更を考える時点で、検査者としては子どもに対して「こう関わったら、反応が違うのでは？」という予期があります。このように予期できること自体、検査者の力量が現れているわけで、このような検査の臨床的活用は発達アセスメントとして有効であると思います。しかし、ここに「通過・不通過」

の判断を合わせようとする、「通過なら発達の力量がある」「不通過なら発達の力量がない」という思考につながりやすくなります。

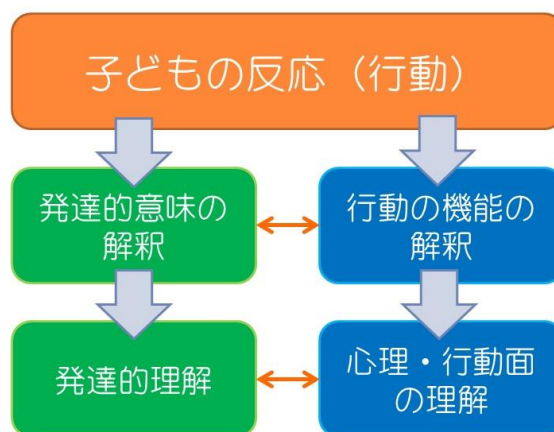


図2. 子どもの反応と、評価・解釈のプロセス

図2は、子どもの反応に対する検査場面での評価のプロセスをまとめたものです。上から順に考えていきます。まず検査課題に対する「子どもの反応（行動）」を観察し、基準に合わせて通過・不通過を評価します。つまり「通過・不通過」は「観察された行動についての評価」であり、発達の力量を直接評価するものではありません。その後、「観察した行動の解釈」を行動の発達の意味や機能の観点から行い、子どもの発達像の理解や心理・行動面の理解につなげていきます。

1つだけ、具体的な検査項目を挙げてみます。「円板回転」の不通過の反応に「位置反応」というものがあります。はめ板の位置関係が変化しているにも関わらず、1つ前の課題（「円板はめる」）と同じようにはめようとするため、結果的にははめることができないという反応です。「位置反応」では「円板回転」は不通過となりますが、この「位置反応」自体は適応的な行為です。う

まくいった行動を繰り返すというのは、多くの場合非常に効果的な方法だからです。

また位置反応のとき、子どもは何度も同じ場所にはめようと繰り返しながら、不満そうな様子を見せることがあります。子どもは

「はまっていない」ということに気がついていて様子で、この気づきも大切なことです。

検査項目の通過・不通過が、子どもの発達の力量と関係が深いことに疑いはありません。しかし、「+なら力がある」「-なら力がない」と考えてしまうことには抵抗があります。検査上は一と評価される反応であっても、子どもの行動の中から子どもの力を見て取ることはできるからです。

行動の機能にも目を向ける

そして、子どもの行動の発達の意味だけでなく、子どもの行動の機能に注目することも大切です。

「できそうなのに、子どもがふざけて検査に応じない時、どう評価したらよいか？」という質問を受けることがあります。自分自身も経験があることですが、その時も「子どもは何のために“ふざける”という行動をとるのか」をまず考える必要があります。自身の経験では、“ふざける”という行動をとる子どもであっても、全ての検査項目で終始一貫して“ふざける”ケースにはまだ出会ったことがありません。素直に応じる課題もあれば、ふざけてしまう課題もある。どのような課題に対して“ふざける”という行動を選択しているのかを見ていくことで、その行動にどのような意味（機能）があるのかが見えてきたりします。例えば、“ふざける”ことで、自分にとって難しそ

うと思う課題を「回避」する子どももいます。この場合、“ふざける”行動は、課題の難易度とも関係して出現している訳ですから、子どもの発達の力量とも関連付けて考える必要があります。

行動の「機能」を念頭においておくと、「ふざけるのはダメ」「ふざけるのは大人がなめられているから」「ふざけて困る子」という一般的な理解を超えて、「うまくヘルプや困難の表明ができない」「試行錯誤しながらの学びが苦手」「できることはやり、難しそうと思うと全く手を出さないので、経験にムラができやすい」という子どもの特性を理解することができます。そうすると、大人の対応も、叱る・指導するという関わりではなく、スモールステップを作る、気持ちの表現を促すといったものによって変わってくると思います。

通過・不通過によって検査結果である発達年齢や発達指数は変化しますから、その判断はもちろん大切です。しかし、それに捉われるあまり、子どもの行動そのもののへの注目が薄れては元も子もありません。その点は心に留めておきたいところです。

バックナンバー

- 第10号 発達検査でわかること
- 第11号 通過・不通過
- 第12号 解釈・見立て・所見
- 第13号 検査手続き
- 第14号 導入
- 第15号 発達検査でわかること②
- 第16号 発達検査のもつイメージ
- 第17号 発達心理学用語講座 (K式編)
- 第18号 発達心理学用語講座 (K式編②)